

シンポジウム／ウタとカタリー比較歌謡研究の現場から

## ウタとカタリのあいだ

永池 健二

ウタとカタリ。この、日本の口承文芸における最も基本的な二種の形式は、言語表現として、それぞれのような特質を持っているのか。それは、口承文芸の大きな括がりの中でそれぞれどのような位置を占め、互いにどう重なり合い、どこで別れてくるのか。

両者が性質の異なる異種の言語表現であることを、私たちは経験的に知っている。しかし、一度両者の差異を厳密に規定しようとする、その境界はとたんにあいまいで不明なものとなってしまう。文字によって記された記録から遡って文学の表現の初源へ至ろうとする古代文学研究の立場、音曲と詞章の両面の総合的研究が求められる中世のカタリモノや歌謡研究の立場。採集された民俗資料を対象とする昔話研究や、民謡の民俗音楽的研究の立場。こうした、それぞれの立場や対象、資料の差異、その視点や方法の差異によって、ウタとカタリは、それぞれ様々な相貌を見せるからである。詞章が実際に音声をもって表出される祭儀や芸能の場においても、ウタとカタリは、一

方では明確に区別されながらも、一方ではまた、しばしば分ち難く結び付き重なりあつて表れる。

ウタはうたわれるものであり、カタリはかたられるものである。しかし、口承文芸研究の立場からいえば、うたわれるウタ、かたられるカタリの周辺には、あるいはよまれるウタがあり、となえられるウタがあり、かたられるウタもあれば、よまれるカタリやうたわれるカタリのごときものもある。ウタとカタリという口承文芸の二形式は、ウタウ、カタル、ヨム、トナエルといった言語表現の諸形式と多様に結び付き複雑な相貌を見せて私たちの前にある。ウタウとカタルという言語行為を軸として、そうした錯綜した表現の位相を丁寧により分け、解きほぐして、その境域を明確にしていく地道な作業こそが求められよう。

かつて柳田国男は「うたう」と「かたる」とは元々異なるものと明確に区別した上で、両者の分界が紛れやすくなってきたところに、舞と踊りという二種の「作業」と深く結び付いて展開してきた日本の口承文芸の独自の軌跡を見いだした（『木思石語』「口承文芸とは何か」。残念ながら、この柳田の重要な問題提起は、その後彼自身によっても深められることのないまま、口承文芸研究の歴史の中で置き去りにされてきたかのように思われる。

本シンポジウムは、このような問題意識の下に企図された。基調となるべき講演を、古代文学研究の立場から南島の歌謡を

も視野に入れて、ウタとカタリの初源について尖鋭な問題提起を重ねてこられた藤井貞和氏に依頼し、それぞれの立場から歌謡を中心として詞章の実際の演唱の場に深く関わり、具体的な調査の豊富な経験を持つ三氏に、パネラーとして報告をお願いした。報告では、議論の前提となるべき用語の定義や概念規定にあえて深入りせず、具体的な演唱の場における実際の事例をベースに、その比較検討によって問題点が浮き彫りとなるよう問題提起をお願いした。「比較歌謡研究の現場から」と題したのである。

酒井正子氏の報告では、南島歌謡研究の立場から、「鳥賊曳き（いきやびき・いちやびち）」と呼ばれる鳥賊釣りの漁師の遭難をテーマとした同名同内容の歌が、一方で長詞形の叙事歌謡として、他方では掛合いによる短詞型の歌謡として歌われるという興味深い事例が提示された。藤田隆則氏からは、古典・民俗芸能の音楽的研究の立場から、中世芸能としての能に見えるウタイとコトバの交替が、同音（唱和可能）と独唱（唱和不可能）の対立であり、それが歌い手と聞き手の参加態度を規定し、参加者の空間配置や演出にまで展開していくという事実が、能の演出の歴史的な変遷を踏まえて指摘され、また、井上さゆり氏からは、ビルマ古典文学研究の立場から、ビルマの古典における「詩（カビヤー）」と「歌謡（タチン）」という二大種別の区分について、その演唱の場や押韻形式、作詞法などの差異に及ぶ問題点が具体的に提示された。

いずれも具体的な演唱の実際の事例を踏まえた三氏の報告に對して、会場からも活発な質疑がなされた。個々の具体的事例への興味から議論が個別の話題に集中し、全体化、総合化の方向に進み得なかったのは残念であったが、議論の応酬を通じて、論者の立場によってウタとカタリについての定義や位置付けに大きな懸隔のあることが改めて浮き彫りになった。今後、口承文芸研究の立場から、ウタとカタリの初源やその表現の位相の差異を追究するためには、何よりも、現在に残っているその具体的な演唱の実例を数多く集め、その比較研究を積み重ねてゆかねばなるまい。本シンポジウムでの三氏の問題提起が、そうした機縁の一つとなれば幸いである。

（ながいけ・けんじ／奈良教育大学）